

〈論文〉

モチエ滞在 (1762~64年) 以前の ルソーと植物学

田 中 恒 寿

はじめに

『孤独な散歩者の夢想』の中でルソーは次のように述べている。「樹木、灌木、草花は大地の装飾であり、衣服である。裸で草も生えず、見渡すかぎり石ころと泥土と砂地ばかりの野の眺めほどわびしいものはない。だが、自然によって活気づけられ、婚礼の衣装をまとい、水の流れと鳥の歌声に取り巻かれた大地は、自然の三つの領域の諧調によって、生氣と興味と魅力に満ちた光景を人間の前に展開する。それはこの世において人間の目と心情が決して飽きることのない唯一の光景なのだ。(注1)」実際、私たちはしばしばルソーの作品の中で、三界の調和によって美しさを増し、見る者に平穏な安らぎをもたらす自然の光景を見出すことができるが、その光景を生き生きとした、魅力的なものにする第一の要素として、ルソーが植物を重んじていることは、今挙げた引用からも容易に見て取れるだろう。興味深いことに、『植物用語辞典のための断片』の「植物 (Plantes)」の項においても、よく似た表現が用いられている。「植物——地球の表面に散布されて、これに衣をまとい飾っている草木。裸の大地を目にするほど味気ないことはない。樹木がこんもり茂った山、小さい森に縁取られた川、緑を敷きつめた野原、そして花を色とりどりにちりばめた広い谷間、こうした風景を眺めるほど楽しいことはない。(注2)」ルソーにとって植物は、まずなにより、風景を美しく飾るものであり、眺めて楽しむものであったと言えるだろう。

それに加えて、私たちは、最初に挙げた『孤独な散歩者の夢想』からの引用で用いられている「興味」という言葉を見逃すわけにはいかない。これを書いた当時のルソーにとって植物は、尽きせぬ探求心をかきたてる存在でもあったのだ。よく知られているように、1762年6月、『エミール』がパリで焚書となり、ルソーは身の危険から逃れるためにパリを脱出してイヴェルドンを経由した後、スイスのとある谷間の村モチエにしばらくの間腰を落ち着けるようになるのだが、そのモチエに滞在していた1762年から64年までの間に、

土地の医師で植物にも造詣の深かったジャン＝アントワーヌ・ディヴェルノワという人物から植物学を学び、それ以降も熱心に植物の研究に打ち込んだために、やがては玄人はだしの知識を持つに至った。1771年にはビュフォンの『博物誌』の植物学部門について執筆協力の依頼も来ている(注3)ほどだし、『植物学についての手紙』(1771～73年にかけて書かれたドレッセル夫人宛の手紙8通をまとめたもの)は、素人向けの植物学入門書として好評を博し、『植物のメタモルフォーゼ』を書いたゲーテも絶賛したと言われている。また、すでに引用として取り上げた『植物用語辞典のための断片』(1774年執筆)は、230項目ほどの小辞典ながら、フランス語で書かれた初めての植物学用語辞典としての意義は大きかったと思われる。

このように、ルソーと植物との関わりは浅からぬものであったと言えるが、植物学関係の著作以外でも、ルソーの作品中に現れる自然描写において、植物は大きな役割を果たすものであり(注4)、研究テーマとしても興味深い。また、ルソーにとっての植物の意味を明らかにすることは、ルソーの自然感情を理解する上で欠かすことができないと同時に、ルソー思想の鍵である「自然」の概念を理解する一助ともなり得るものであろう。ルソーにおける植物の重要性は、これまでも何人かの研究者によって指摘されてきた。例えば、すでに今から一世紀以上も前にA・ヤンセンが、詩人、研究者、教師という三つの側面から植物学者としてのルソーを浮き彫りにした『植物学者としてのルソー』(1885年)(注5)という労作があるが、これを除けば、ルソーの植物学は、わりと近年になって注目され始めたテーマであると言える(注6)。また、ルソーの描く風景の中で植物が果たす役割について論じたものとしては、M・エジェルダンジェの「ルソーにおける植物的風景」と題された論文を代表として挙げるができる(注7)。

その一方で、周囲の人々から迫害を受けているというルソーの強迫観念は、『エミール』の糾弾以降いっそう激しいものになっていったわけであるが、植物について考察したり、その構造を観察したりすることは、そのような強迫観念に対する即席の治療法として役に立ったとする見解(注8)もあり、その指摘自体、正当かつ貴重なものであるが、それはあくまでルソーの植物学の一面を言い当てたにすぎず、ルソーの植物学は立派にそれ自体としての独立した価値を有しているということまで不当に軽視してしまうことは、決して好ましいことではないだろう。確かにルソーが植物の研究に熱中するようになったのは、『エミール』の弾劾にともなってパリから逃れ、モチエに滞在するようになってからのことだが、ルソーと植物との深い関係は、これから詳しく見ていくように、すでに少年時代から綿々と続いており、植物学者としてのルソーは、ある意味で必然の産物であるとも言えないのである。小論は、モチエ滞在以前のルソーと植物との関係を跡付けながら、こ

のいわば前史にあたる部分が、後の植物学者ルソーをどのように準備し、その植物学研究にいかにして寄与したかを明らかにすることを目的とする。その際特に注目すべきは、第一にヴァランス夫人が若きルソーに及ぼしたな影響 (第一章) であり、第二に『新エロイーズ』第四部手紙 11 のいわゆるエリゼのエピソードに登場する植物 (第二章) である。

第一章 ヴァランス夫人の功罪

すでに述べたように、伝記的な観点から植物学者としてのルソーを扱うとき、一般的にはモチエに滞在していた 1762～4 年という年代から話を起こすのが最も普通である。事実ルソーも、モチエに滞在中にディヴェルノワから植物学の手ほどきを受けたと、『告白』や『孤独な散歩者の夢想』の中で再三にわたって証言しているし、「第七の散歩」においては、「一足飛びに植物学者になった(注 9)」とも述べているほどだ。だが、これも多くの研究者が言及していることだが、20 代のルソーがシャンベリーやシャルメットにおいて共に暮らし、多大な影響を受けたヴァランス夫人の存在を忘れるわけにはいかないだろう。ただし、植物学者ルソーの前史を飾る単なるエピソードとしてではなく、ルソーの植物学者としての基本姿勢にかかわる重大な鍵を握っている人物として、私たちは、ルソーが「ママン」と呼んで親しんだこの美しい夫人に注目したい。

その際、ひとつ注意しておかなくてはならないのは、植物学者としてのルソーにかぎり、ヴァランス夫人の影響は、けっして良い方にばかり作用したわけではないということだ。むしろ誤った偏見を若いルソーに植え付けてしまい、ひとかどの植物学者になり得たかもしれない逸材を、素人の域に埋もれさせてしまう結果を招いた張本人であるとも言える(注 10)。しかし、後述するように、うがった見方をすれば、ヴァランス夫人によってもたらされた障害を乗り越えることによってこそ、ルソーの植物学の思想的な土台が築かれたのであり、その意味でヴァランス夫人は、良き反面教師だったと言えるのかもしれない。

ところで、『告白』をひもといてみると、少年時代の頃からすでに、植物はかけがえのないものとしてルソーの身近にあったことがわかる。例えば、地上の楽園になぞらえられたボデーでの生活が、有名な「櫛」の一件で無実の罪を着せられてからというもの、まったく味気無いものになってしまったとして、ルソーは次のように書いている。

La campagne même perdit à nos yeux cet attrait de douceur et de simplicité qui va au cœur. Elle nous semblait déserte et sombre; elle s' était comme couverte d'un

voile qui nous en cachait les beautés. *Nous cessâmes de cultiver nos petits jardins, nos herbes, nos fleurs. Nous n'allions plus gratter légèrement la terre et crier de joie en découvrant le germe du grain que nous avions semé.* (注 11)

この部分を読むかぎりにおいて、畑で草花を育てる喜びは、少年ルソーの幸福な田園生活の重要な部分であったようだ。植物と接することは、少年期のルソーの歓喜や悦楽の体験と分かち難く結び付いており(注 12)、植物はすでに純粹で汚れを知らない生を象徴するものとして、ルソーの心の中に大きな地位を占めていたとすることができるのではないだろうか。

ところが、1732 年ごろのこと、当時シャンベリーにおいてヴァランス夫人と暮らしていた二十代のルソーは、クロード・アネという植物に詳しい人物の身近にいたにもかかわらず、夫人の薬草趣味に閉口して、植物の研究を始める絶好の機会を逸してしまったという。このアネという人物に関してルソーは『告白』第五巻で次のように述べている。「アネは植物研究にたいへん情熱を持ち、この趣味をヴァランス夫人がますます奨励したので、本物の植物学者になった。(注 13)」ヴァランス夫人は王立植物園を設立し、アネをその専任の研究員にするというような計画すら立てていた。この計画が実行されれば、おそらく植物研究に身を投じていたであろうとルソーは言う。ところが計画は頓坐し、結局ルソーには植物学に対する偏見のみが植え付けられる、という不幸な結果に終わってしまった。ヴァランス夫人の薬草趣味のおかげで、植物の研究というと、薬品としての効用しか思い浮かばなくなってしまったというわけだ。

Mais n'ayant alors aucune idée de la botanique, je l'avais prise en une sorte de mépris et même de dégoût; je ne la regardais que comme une étude d'apothicaire. Maman, qui l'aimait, n'en faisait pas elle-même un autre usage; elle ne recherchait que les plantes usuelles pour les appliquer à ses drogues. Ainsi la botanique, la chimie et l'anatomie confondues dans mon esprit sous le nom de médecine, ne servaient qu'à me fournir des sarcasmes plaisants toute la journée, et à m'attirer des soufflets de temps en temps. (注 14)

薬草学やあるいは医学と混同してしまったがゆえに植物学を軽蔑し、嫌悪するというこの偏見は、ルソーの植物学を理解する上できわめて重大な意味を持っている。というのも、植物学を薬草学から切り離して考えることによって、初めてルソーは植物学の魅力を解し、

興味を抱くことができたからである。逆説的には、それだけヴァランス夫人のもとで培われた薬草嫌いの影響は、ルソーの植物学に深く根付いているとも言えるだろう。そして、薬草学からの脱皮ということが、後のルソーの植物学の基本をなす主張であり、ルソーの植物学の重要な部分を性格付けることになるのである。

ただし、このような誤解もしくは偏見というのは、ルソーにのみ特有なものではなく、いわゆる近代植物学が確立される以前においては、ごく一般的な現象だったようだ。実際、「パリ本」と呼ばれる『告白』のヴァリエーションには、《je ne la regardais》の後に《, comme font tous les ignorants,》という語句が挿入されている(注 15)。近代の生物分類学以前にまず薬草学として植物学が発達したのはごく自然なことであり、プリニウスなどは、動物に関しても効用の面から多くのことを論じているし、中国の本草学にしても、そもそも動植物が、薬になるにしろ毒になるにしろ、人体にいかなる影響を及ぼすかという観点で、自然物を体系化したものであった。

ルソーは『植物用語辞典』の序文で植物学の歴史を概観しているが、これは歴史を客観的に記述したものとしてではなく、植物学という学問に対するルソーの姿勢を鮮明に表した宣言として読まれるべきものであろう。開口一番、薬草学批判が現れていることは注目に値する。

Le premier malheur de la botanique est d'avoir été regardée, dès sa naissance, comme une partie de la médecine. Cela fit qu'on ne s'attacha qu'à trouver ou supposer des vertus aux plantes, et qu'on négligea la connaissance des plantes mêmes. (注 16)

それでは、植物の薬効にのみ気をとられている医者や薬屋がなおざりにしている「植物そのものの認識 (connaissance des plantes mêmes)」とは、いったいどのようなものを指すのだろうか。ルソーは今の引用のすぐ後の方で次のように続けている。

La botanique n'était rien, il n'y avait point d'étude de la botanique, et ceux qui se piquaient le plus de connaître les plantes n'avaient aucune idée, ni de leur structure, ni de l'économie végétale. (注 17)

かつての植物学研究者、すなわち本草学者は、植物の構造についても組織についても、何ら知識を持ち合わせていなかったというのである。したがって、ルソーの言う「植物そのものについての認識」とは、植物の構造や組織についての認識ということになる。この

「植物の構造や組織」という言葉には、いくら注意を払っても払いすぎることはないだろう。植物学が薬草学一辺倒から脱して、植物の構造や組織について研究し、体系に則って整理するという、いわゆる生物分類学として16世紀以降、新たに開拓されていったとすれば、ルソーがこの序文を書いたのは、いまだ不備の多かった分類学が、リンネの『自然の体系』(1735年)と共に一新され、あるひとつの頂点をきわめて間もない頃のことだと言えるが(注18)、ルソーはそのような植物学の歴史をなぞりながら、一貫して新しい植物学を賞揚し、薬草学を植物学から排除しようとしてさえしているのである。

それでは、なぜそれほどまでに、ルソーは薬草学を嫌ったのだろうか。それが時代の趨勢だったからであろうか。それだけではあるまい。ルソーは薬草という観念によって植物の研究が「毒される」(注19)と考えていた。植物という、自然の中でもとりわけ美しく興味深い対象を観察し考察することを、純粹にそれ自体として楽しみたいという欲求が、ルソーには強かったのだ。その楽しみが医学や薬学といった卑近な目的に従属させられることは、我慢できなかったのだろう。スタロビンスキーは、ルソーにとって「植物は自然の純粹性を証明するもの(注20)」であったとする卓見を残しているが、まさに植物の純粹性を保つためには、薬効などという「不純な」目的を持ち込むことは許されないのだ(注21)。

さらに、『孤独な散歩者の夢想』第七の散歩の中でルソーは、鉱物学、動物学、天文学等と比較しながら、なにゆえ自分が、とりわけ植物学を好むのかを論じているが、私たちはその中から、なぜ薬草学が嫌いなのかという問いに対する別な答えを読み取ることができるだろう。

それは、特に動物学との比較によって明らかにされるように、きわめて生理的な感性にもとづく直感的なものである。植物は、動物と違って逃げ回ることもなく、生きたまま、自然に成育している状態で観察が可能である。それに対して動物の解剖のような血腥い光景は、ルソーの最も忌避するものであった。

L'étude des animaux n'est rien sans l'anatomie. [...] Quel appareil affreux qu'un amphithéâtre anatomique, des cadavres puants, de baveuses et livides chairs, du sang, des intestins dégoûtants, des squelettes affreux, des vapeurs pestilentielles! Ce n'est pas là, sur ma parole, que J[ean]-J[acques] ira chercher ses amusements. (注22)

おぞましさや醜悪さを表す形容詞を多用しながら、どろどろした肉や、べとべとした血

の滴りといったものに、ルソーは強い不快感を示している——「ジャン＝ジャック」というファーストネームによる主語を用いたところからも、その不快感が理性による判断に拠るものではなく、もっと深いところに根差した感情であることがうかがえるだろう——が、薬剤師が乳鉢で植物をすりつぶす際にも、おそらくは同じような直観的不快感を抱いたのではないだろうか。次の例を見てみよう。

Ces idées médicales ne sont assurément guère propres à rendre agréable l'étude de la botanique, elles flétrissent l'émail des prés, l'éclat des fleurs, dessèchent la fraîcheur des bocages, rendent la verdure et les ombrages insipides et dégoûtants; toutes ces structures charmantes et gracieuses intéressent fort peu quiconque ne veut que *piler tout cela dans un mortier*, et l'on n'ira pas chercher des guirlandes pour les bergères parmi des herbes pour les lavements. (注 23)

乳鉢ですりつぶされた植物は、その組織的な原形をとどめぬ姿にまで破壊されてしまう。形がなくなると、効能によってしか評価されなくなり、せっかくの花畑が浣腸という観念に汚されてしまうことにもなりかねない、というわけだ。さらに付け加えると、先に述べたように、ルソーは子供の頃から、自然の事物の中でもとりわけ植物に対して親密な感情を抱いていた。ルソーが植物を乳鉢ですりつぶすことにこれほどの拒否反応を示したのは、それが他ならぬヴァランス夫人の手によってなされたからだということもあるのではないだろうか。無垢な田園生活の象徴であり、安らぎと幸福の源泉であった植物が、これまた最愛のヴァランス夫人の手で無残に打ち砕かれてしまう。《insipide》や《dégoûtant》という形容詞によっても表わされるやり切れぬ思いや強い失望感をぶつける対象として、薬草学という学問自体に矛先を向けたとしても不思議はないのではないか。

ともあれ、このような直感的な判断を大事にし続けたからこそ、後の植物学者としてのルソーの¹があり得たのだと言っても過言ではないだろう。乳鉢ですりつぶすことは、別な意味で、先に見た「植物そのものの認識」、すなわち、構造や組織について探求することの対極にある行為であることは言うまでもない。

さらに、ルソーの思想全体と深く関わる問題でもあるのだが、あるがままのものに人間が手を加えて変質させるということをルソーは大きな抵抗を感じていた。医学もまた、身体という自然に介入してその本性を歪める技術に他ならない。そもそもルソーの医学に対する不信の念は、かなり徹底したものであった。青年時代から病弱で、医者にかかることの多かったルソーは、当時から医者が暇つぶしと金儲けのことしか考えていないことを嘆

いているが、例えば第七の散歩においも、尿閉症に悩まされ続けたルソーは次のように述べている。

Quinze ans d'expérience m'ont instruit à mes dépens; rentré maintenant sous les seules lois de la nature, j'ai repris par elles ma première santé. Quand les médecins n'auraient point contre moi d'autres griefs, qui pourrait s'étonner de leur haine? Je suis la preuve vivante de la vanité de leur art et de l'inutilité de leurs soins. (注 24)

このようなルソーの医学に対する不信の念は、もっと深いところまで掘り下げて考える必要があるだろう。今の例からもわかるとおり、ルソーの医学に対する反感の根底には、人為の排除、言い替えれば、あるがままの自然の尊重という、ルソーの基本的な思想が横たわっているのである。ルソーが植物学から医学的な要素を敏感に嗅ぎとって反発したという事実の背後にも、同様な思想性が存在していることを、私たちは見逃すことができない。人為が自然を変質させるという考え方は、「自然人」や「自然教育」を貫く中心的なモチーフでもある。別な言い方をすれば、ルソーは、植物学の中に自らの思想の一つの表現を見たからこそ、植物学にあれほどのめり込んでいったのだとも考えられる。

先に私は、ヴァランス夫人の悪影響は、逆説的に、ルソーの植物学の思想的土台を形成するのに寄与したと述べた。「人為的な」薬草趣味を許容することのできなかったルソーは、薬草学とは異なる形で植物学が可能であることに気づいて、初めて植物学の面白さに目覚めたのである——決定的となったのはモチエ滞在中のことだが、次章で見るように、『新エロイズ』執筆当時には、すでに植物学に理解を示していた節がある——。人為的変質を植物にもたらす薬草学の要素を排除することによって、自分にとって理想的な植物学を形成していく過程は、興味深いことに、ルソー思想の形成過程と軌を一にしている。ルソー思想の原点とも言うべき『学問芸術論』を始発点として、『エミール』をその集大成として位置付けるならば、『エミール』が完成して間もなく植物学と出会ったという事実は象徴的であろう。薬草趣味に対する反発の背後には、後のルソーの思想を貫くことになる基本的な考え方の原形が潜んでいるのであり、それがルソー中期の代表作である『エミール』において明確な形をとって現れたとき、ルソーはようやく自らの思想にかなった植物学を見いだすのである。言い替えれば、「自然」の概念を軸とした思想形成という下地なくしては、ルソーの植物学はありえなかったとも言えるだろう。この意味で、ヴァランス夫人のもとでは断固として拒否していた植物の研究に、モチエ滞在以降、熱心に打ち込むようになったということは、ルソーの思想的成熟の証しであるとも取れるのである。

以上、見てきたように、ヴァランス夫人の薬草趣味が、ルソーを植物学へと導く際、第一に乗り越えるべき大きな障害として立ちはだかったわけだが、それによって、ルソーが植物自体との接触から遠ざかったというわけではない。私たちは、かの有名なツルニチニチソウのエピソードもヴァランス夫人にまつわるものであったことを忘れることはできないだろう。また、それにもまして、ヴァランス夫人は実際に、その薬草趣味によってルソーを植物学から遠ざける障害のみをもたらしたわけではない。『告白』の第六巻でルソー自身が述べているように、薬としての効用だけでなく、花の構造について珍しいことをいろいろと教えてくれたのも、外ならぬヴァランス夫人だったのである。

Elle me fit remarquer dans leur structure mille choses curieuses. (注 25)

なるほど、ルソー自身、ディヴェルノワに植物学の手ほどきを受けてから「一足飛びに植物学者になった」と述べてはいるが、今まで確認したように、モチエ滞在以前にも、植物に対して特別な思い入れを持っていたことは間違いない。そして、ルソーが必ずしも、突如として植物学者になったわけではないことを示すもう一つの重要な根拠として、次章では、エリゼのエピソードに登場する植物を分析してみることにしたい。

第二章 エリゼのエピソード

再三述べているように、一般に、植物学者としてのルソーが誕生したとされるのは、モチエに滞在していた 1762 年から 64 年のことである。しかし、それでは、ヴァランス夫人と暮らしていた頃から一貫して薬草学を受け入れることのできなかったルソーが、モチエでディヴェルノワからリンネの分類学を学ぶまでの二、三十年という歳月は、植物学者ルソーの誕生になんら寄与することがなかったかという点、そうでもない。

私たちは、ヴァランス夫人がルソーに、植物学に対する偏見を植え付けただけでなく、花の構造についてもいろいろと教えてやることで、後に植物学者となるべき種を播いたということを確認した。事実、ヴァランス夫人のもとを離れてからディヴェルノワに植物学の教えを受けるまで、ルソーによる植物の探求は完全に空白のままになっていたわけではないようだ。

例えば、1756 年から 58 年にかけて執筆された『新エロイーズ』(1761 年出版) 第四部手紙 11 の、いわゆるエリゼのエピソードの中には驚くほどたくさんの植物が登場している。このエピソードは、プレーヤッド版にして 18 ページ余りの分量だが、その中に 50 以上の

植物名が挙げられているのである。少し長くなるが、特徴的な部分を次に引用してみよう。

Le gazon verdoyant, épais, mais court et serré, était mêlé de *serpolet*, de *baume*, de *thym*, de *marjolaine*, et d'autres herbes odorantes. On y voyait briller mille fleurs des champs, parmi lesquelles l'œil en démêlait avec surprise quelques-unes de jardin, qui semblaient croître naturellement avec les autres. Je rencontrais de temps en temps des touffes obscures, impénétrables aux rayons du soleil, comme dans la plus épaisse forêt; ces touffes étaient formées des arbres du bois le plus flexible, dont on avait fait recourber les branches, pendre en terre, et prendre racine, par un art semblable à ce que font naturellement les mangles en Amérique. Dans les lieux plus découverts, je voyais çà et là, sans ordre et sans symétrie, des broussailles de *roses*, de *framboisiers*, de *groseilles*, des fourrés de *lilas*, de *noisetier*, de *sureau*, de *seringa*, de *genêt*, de *trifolium*, qui paraient la terre en lui donnant l'air d'être en friche. Je suivais des allées tortueuses et irrégulières bordées de ces bocages fleuris, et couvertes de mille guirlandes de *vigne de Judée*, de *vigne vierge*, de *houblon*, de *liseron*, de *couleuvrée*, de *clématite*, et d'autres plantes de cette espèce, parmi lesquelles le *chèvrefeuille* et le *jasmin* daignaient se confondre. Ces guirlandes semblaient jetées négligemment d'un arbre à l'autre, comme j'en avais remarqué quelquefois dans les forêts, et formaient sur nous des espèces de draperies qui nous garantissaient du soleil, tandis que nous avions sous nos pieds un marcher doux, commode et sec, sur une *mousse* fine sans sable, sans herbe, et sans rejetons raboteux. (注 26)

ここに抜き出した箇所だけでも 20 以上の植物名を数えるが、植物学にはまだ目覚めていなかったはずのルソーが、植物に関してはかなりの知識を持っていたことをうかがわせる要素は、列挙される植物名の数の多さだけではない。問題はその列挙の仕方である。まず、木の枝に絡み付いて暗がりを生み出すためのつる性の植物として《*vigne de Judée* (マルバノホロシ)》以下、《*vigne vierge* (ノブドウ)》、《*houblon* (ホップ)》、《*liseron* (ヒルガオ)》、《*clématite* (クレマチス)》、《*chèvrefeuille* (スイカズラ)》、《*jasmin* (ジャスミン)》の 7 種が挙げられている。ただし、《*couleuvrée* (イブキトラノオ)》は、つる植物ではない。「蛇に似ている」という意味を表すこの名前から、ルソーがつる性と即断したのかも知れない。次いで、頭上の開けた明るい場所では落葉低木が《*rose* (バラ)》以下、《*framboisier* (キイチゴ)》、《*groseille* (スグリ)》、《*lilas* (ライラック)》、《*noisetier* (ハシバミ)》、《*sureau*

(ニワトコ)》, 《seringa (バイカウツギ)》, 《genêt (エニシダ)》の 8 種, 挙げられている。ただし, 最後に付け足された《trifolium (シロツメクサ)》はこの範疇に入らない。引用の最初の方には林床の様子が描かれており, 芝に混じって芳香性をもつシソ科の草本が《serpolet (イブキジャコウソウ)》, 《baume (ハッカ)》, 《thym (タイム)》, 《marjolaine (マヨラナ)》の 4 種。さらに終りの方では, 足の裏に快い感触を与える《mousse (コケ)》と言った具合に, ほぼ適材適所, 植物を分類しながら, 上層, 中層, 下層と, 立体的に森が構成してあるのである。

このように, 一見雑然として, 迷路のような観を呈するエリゼの豊饒な植物群は, 決して作者が思い付くまま無秩序に列挙されているのではない。それどころか, 個々の植物の特徴に応じた分類, 配置が成されているのである。主人公のサン＝ブルーに, 世界の果てにやってきたような錯覚を起こさせるためとして, マングローブのように見える木も混在しており, 植生の観点からすると, 奇異な印象を与えられるが, あくまでそれは似せて作られたものであり, レマン湖畔のヴェヴェに設定されたクラランの農場に, 熱帯産のマングローブをそのまま持ち込むようなことは, 敢えて避ける細かい配慮がなされている。このような点からも, 小説作者ルソーの植物に関するこだわりの大きさがうかがえるだろう。

さらに, エリゼのエピソードには, もう一つ注目すべき点がある。登場人物の一人であるヴォルマルが, 「花は通りすがりに私たちの目を楽しませるためにあるものであって, そんなに綿密に解剖するためにはありません」と主張するのに対して, 作者自身が次のような注を付けているのだ。

* [Note de l'auteur] Le sage Wolmar n'y avait pas bien regardé. Lui qui savait si bien observer les hommes, observait-il si mal la nature? Ignorait-il que si son auteur est grand dans les grandes choses, il est très grand dans les petites? (注 27)

小説の作者としてこのような注を敢えてつけたのは, おそらく無神論者として設定されているヴォルマルを遠回しに批判するのが目的だったと思われるが, それはともかくとして, 当時多くの自然探求者にとって, 一般に自然を研究することは, 一種の宗教的行為に他ならなかった。神がいかにしてこの世を整然とした秩序のある美しいものに作りたもうたかを, 人々の前に証明してみせようというわけである。後年の植物学者ルソーにとっても同じことが言える。例えば, 次の引用を見てみよう。

Je n'ai ni dépense à faire ni peine à prendre pour errer nonchalamment d'herbe

en herbe, de plante en plante, pour les examiner, pour comparer leurs divers caractères, pour marquer leurs rapports et leurs différences, enfin pour observer l'organisation végétale de manière à suivre la marche et le jeu de ces machines vivantes, à chercher quelquefois avec succès leurs lois générales, la raison et la fin de leurs structures diverses, et à *me livrer au charme de l'admiration reconnaissante pour la main qui me fait jouir de tout cela.* (注28)

これは第七の散歩からの引用だが、植物組織の細部の観察から神への思いに至るというプロセスが、明らかに示されている。

先に挙げたエリゼのエピソードにおける作者の注でも、そのような植物学者ルソーを予見させるひとつの萌芽が見て取れるわけだが、ともあれ、宗教的観点からにしても、「綿密な解剖」、すなわち、植物の微細な構造、その中でも特に花の構造を観察して、その仕組みを調べるといった、まさに植物学者ルソーの言うところの新しい方法による植物学的探求は、『新エロイズ』執筆当時のルソーの考えでは、まったく否定すべき行為ではなくなっているのである。このことは、植物学といえば医学の一部門としてしか認識せずに、頭から拒絶してかっていたヴァランス夫人時代のルソーとは、すでに別人であることを意味している。

ルソーは1756年に、パリ郊外の、モンモランシーの森に隣接するエルミタージュへ移り住んで間もなく『新エロイズ』を書き始めているが、この頃ルソーが実際に植物の「綿密な解剖」を行っていたかどうかははっきりしない。しかし、『告白』第5巻の中でルソーは、「ここ十年間の田園生活は、もっぱら植物採集に費やされた(注29)」と述べている。この部分を書いたのが1766年ごろのことであるから、ルソーの言う「田園生活」が、1756年4月9日にパリという大都会を去って、モンモランシーの森に抱かれたエルミタージュに隠棲するようになって以来の生活を指していることは容易に推測できる。

ところで、1762年1月26日付けのマルゼルブ長官宛の手紙を見ると、「私は1756年4月9日に生き始めた(注30)」と書いていることから、このエルミタージュへの移住に始まるいわゆる「田園生活」は、ルソー個人にとって非常に大きな意味を持っていることがわかるだろう。これを機に、『新エロイズ』、『エミール』、『社会契約論』と、ルソーの代表作が立て続けに生み出されてゆくわけだが、その「田園生活」の豊かな実りの一つである『新エロイズ』において、先ほど確認したような、植物に対するルソーの関心の高さを示す記述が見られるということからすると、モンモランシーの森の自然を発見したことは、植物学者ルソーの誕生に向けてのひとつの大きな転機となったのかもしれない。いずれに

してもルソーは、単に、迫害の意識に苛まれて、植物との透明な交流に救いの道を求めたというわけではなさそうだ。むしろ、当時のルソーにとって植物は、生産的な「新しい生活」に欠かせぬ調度であったと言えるだろう。

おわりに

小論は、これまであまり触れられることのなかった、植物学者としてのルソーの前史をたどる試みであった。ルソーはモチエ滞在中に、たまたま植物学に興味を持ったわけではない。植物は、すでに少年の頃からルソーの身近にあって、幸福な生活に彩りを添えるものであった。ヴァランス夫人のおかげで植物学に手を染める絶好の機会を逸してしまったとはいえ、エルミタージュに移り住んでからは植物採集にもいそしみ、植物に対するこだわりは、『新エロイーズ』にも反映されているのである。つまり、ルソーと植物学は、出会うべくして出会ったのであり、ルソーの植物学は、じつに多くのものを前史的な要件に負っている。植物学者ルソーの全体象を捉える際に、このような視点を欠かすことは決してできないだろう。

略年譜

- 1712年 ルソー誕生。
- 1722～24年 ボセー滞在。
- 1732年ごろ ヴァランス夫人のもとで植物学に対する偏見をうえつけられる。
- 1749～50年 『学問芸術論』執筆。
- 1756年 エルミタージュへ移住（以降、「もっばらの植物採集」）。
- 1757年ごろ 『新エロイーズ』エリゼのエピソード執筆。
- 1762年 『エミール』出版
- 1762～64年 モチエ滞在（J=A・ディヴェルノワから植物学を本格的に学ぶ）。
- 1764～70年 『告白』執筆。
- 1771～73年 『植物学についての手紙』執筆。
- 1773～74年 『植物学用語辞典のための断片』執筆。
- 1776～78年 『孤独な散歩者の夢想』執筆。
- 1778年 ルソー死去。

注

ルソーの作品からの引用は、すべて Jean-Jacques Rousseau, *Œuvres complètes* (Paris, Gallimard, 《Bibliothèque de la Pléiade》, 1959~95, 5 vol.) (以下 O.C. と略す) による。

- 1) *Les Rêveries du promeneur solitaire*, Septième promenade (O.C., tome I, p.1062.)
- 2) *Fragments pour un dictionnaire des termes d'usage en botanique* (O.C., tome IV, p.1239.)
- 3) ジャック・ロジェによると、「ビュフォンとゲーノ・ドゥ・モンベヤールは、1771年に『植物の博物誌』のためにジャン＝ジャック・ルソーの協力を得るようパンクークに依頼」(J. Roger, *Buffon*, Evreux, Fayard, 1989, p.299.) している。
- 4) 例えば、『新エロイズ』、エリゼのエピソードの中で植物が果たす役割の重要性については、拙稿「エリゼの植物について——『新エロイズ』第四部手紙11の読解——」(『仏文研究』第25号、京都大学フランス語学フランス文学研究会、1994年)を参照されたい。
- 5) A. Jansen, *Jean-Jacques Rousseau als Botaniker*, Berlin, Georg Reimer, 1885.
- 6) 大きな意義があるのは、1969年の、R・ヴィルモランが植物学の部門を担当したプレーヤッド版『ルソー全集』第四巻の出版であるが、それに先立って、植物学に関係のあるルソーの書簡を編集し、序文をつけたB・ガーニュバンの業績 (*Lettres sur la botanique par Jean-Jacques Rousseau*, Préfacé par B. Gagnebin, Annoté par J. Bonnot, Paris, Club des librairies de France, 1962) も見逃せない。日本においても、1983年の『ルソー全集』(白水社)の植物学の分野を担当した高橋達明氏の研究は特筆に値するものである。
- 7) M. Eigerdinger, 《Rousseau et le paysage végétal》 in *Poésie et Métamorphoses*, Neuchâtel, La Baconnière, 1973.
その他、N. Behbahni, *Paysages rêvés, paysages vécus dans La Nouvelle Héloïse de J.-J. Rousseau* (Oxford, The Voltaire Foundation, 1989) も刺激的な考察に満ちた論文である。
- 8) J. Starobinski, *Jean-Jacques Rousseau: La transparence et l'obstacle*, Paris, Gallimard, 《Bibliothèque des Idées》, 1971. (特に、第八章の中の「植物との友情」の項を参照のこと。)
- 9) 《Attiré par les riants objets qui m'entourent, je les considère, je les contemple, je les compare, j'apprends enfin à les classer, et me voilà tout d'un coup aussi botaniste qu'a besoin de l'être celui qui ne veut étudier la nature que pour trouver sans cesse de nouvelles raisons de l'aimer.》 — *Les Rêveries du promeneur solitaire*, Septième promenade (O.C., tome I, p.1068, nous soulignons.)
- 10) 『ルソー研究』(桑原武夫編、岩波書店、1951年)において植物学を担当した北村四郎氏は、「もしある科とか属にのみつき専念し、通信が自由にできたのであったら、むろん業績が残ったものと思われる」(p.395)との意見を述べている。
- 11) *Les Confessions*, livre I (O.C., tome I, p.21, nous soulignons.)
- 12) 例えば、秘密の水道を掘ってまでヤナギの苗木を植えようとしたエピソードや、木の上から少女たちの胸元めがけてサクランボの実を投げてよこしたエピソードなどは、特に印象的である。
- 13) *Les Confessions*, livre V (O.C., tome I, p.177.)
- 14) *Les Confessions*, livre V (O.C., tome I, p.180, nous soulignons.)
- 15) cf. O.C., tome I, p.1316.
- 16) *Fragments pour un dictionnaire des termes d'usage en botanique* (O.C., tome IV, p.1201, nous soulignons.)

- 17) *Fragments pour un dictionnaire des termes d'usage en botanique* (O.C., tome IV, p.1202, nous soulignons.)
- 18) 松本俊男『博物学の欲望』(東京, 講談社, 1992 年, p.8) によると, 西洋の本草学は, ルネサンス後期の十六世紀に黄金時代を迎え, その中から次第に実用を離れて生物自体を研究する博物学が発達してきた。
- 19) 《Je sens même que le plaisir que je prends à parcourir les bocages *serait empoisonné* par le sentiment des infirmités humaines s'il me laisser penser à la fièvre, à la pierre, à la goutte et au mal caduc.》— *Les Rêveries du promeneur solitaire*, Septième promenade (O.C., tome I, p.1068, nous soulignons.)
- 20) Starobinski, *op.cit.*, p.280.
- 21) 食べ物に関しても, やはりルソーは, 肉や魚よりも野菜など植物性の食べ物の方を, より自然に近いもの, 自然の純粹さをそこなわないものとして評価している。食べ物としての植物をルソーがどのように捉えていたかについては, 拙稿「ルソーにおける菜食の思想と自然意識」(『仏文研究』第 24 号, 京都大学フランス語学フランス文学研究会, 1993 年) を参照されたい。
- 22) *Les Rêveries du promeneur solitaire*, Septième promenade (O.C., tome I, p.1068.)
- 23) *Les Rêveries du promeneur solitaire*, Septième promenade (O.C., tome I, p.1064, nous soulignons.)
- 24) *Les Rêveries du promeneur solitaire*, Septième promenade (O.C., tome I, p.1065, nous soulignons.)
- 25) *Les Confessions*, livre VI (O.C., tome I, p.245.)
- 26) *La Nouvelle Héloïse*, IV-11 (O.C., tome II, p.472-3, nous soulignons.)
- 27) *La Nouvelle Héloïse*, IV-11 (O.C., tome II, p.482.)
- 28) *Les Rêveries du promeneur solitaire*, Septième promenade (O.C., tome I, p.1068-9, nous soulignons.)
- 29) *Les Confessions*, livre V (O.C., tome I, p.180.)
- 30) *cf. O.C.*, tome I, p.1138.

[附記] 本稿は, 去る 1995 年 7 月 8 日, 小樽商科大学で行われた日本フランス語フランス文学会北海道支部会における口頭発表「植物学者としてのルソーが誕生するまで」の原稿に加筆, 修正を加えたものである。ただし, 主題の一貫性という観点から, ルソーとリンネの影響関係について述べた部分は割愛した。このテーマに関しては, 別稿において改めて論じることにしたい。